



発行所

日刊自動車新聞社

〒105-0012
東京都港区芝大門1丁目10番11号
電話 東京(03)5777-2351代表

©日刊自動車新聞社2024

7月4日
(木曜日)

「eアクスルや電動コンプレッサーを搭載した試験車両を製作した狙いは」

小林正登取締役常務執行役員「eアクスルや電動コンプレッサーを将来的な製品として位置付けているからだ。実際に開発品を搭載した電気トラック（EVトラック）を製作し、当社の十勝試験場（北海道）で試験走行を実施した。（人とくるまのテクノロジー展の）ブースではその映像を披露した」

「製作した車両は、自動車メーカーと議論をするためのものだ。開発品に本当に必要な部品や制御などを当社も研究するが、自動車メーカーからの意見も聞き、開発に反映させたい。そのためには当社も知見を蓄積しないといけないため、車両を製作した。試乗会で議論し、技

T
B
K

小林正登取締役常務執行役員 傍士武執行役員



小林取締役（左）と傍士執行役員

術に反映させるとともにビジネスにもつなげていく」
傍士武執行役員「車両がEV（電気自動車）に様変わりする中で、実際にEVトラックを作ってみて技術を学ぶ必要はある。当社も、商用車がEVにな



インタビュー編

16

メーカーとの議論の深化へ

試験車両製作し技術蓄積

の中でどういった技術を生かせるのか、学んでいるところだ。一方で、（試験車両を）こころまですりあげたと評価する声もあった」

青山学院大学と共同研究を推進

製品開発では青山学院大学と共同研究にも取り組む

小林取締役常務「青山学院大学と（わずかな温度差で効率的に熱を移動させ、放熱させる）『ヒートパイプ』という技術開発に取り組んでいる。大学とのコラボレーションで2年前から開発を始めた。ヒートパイプはスマートフォンではすでに搭載されているが、車載バッテリー向けでは見たことがない。ヒートパイプは、電動製品の開発について若手技術者が講義している。また、大学の研究室へはモータ解析などの研究委託も行ってきている。こうした活動が学生の応募につながった事例も出てきた」

展示会で顧客の需要掘り起こし

傍士執行役員「去年から始めてビジネスにつながった。品質改善や生産能力の増強、生産性向上など、顧客が抱える困りごとを結構ある。こうした課題にたいして、当社が持つものづくりのノウハウを提案することによって、自社技術や製品の認知度向上のため、技術展示会を始めた。小林取締役常務「顧客が求めるテーマに応じ、技術や製品を紹介する技術展示会を始めた。铸件などの素材から加工技術、組み立て技術、製品、さらには工場の生産技術まで幅広く紹介する。直接、顧客からの声を聞けるほか、新たな発見にもつながっている」

トパイプを発熱箇所に取り付けることで熱を一時のうちに逃す効果が期待できる。すでに構造はできている」
大学での取り組みを採用活動にもつなげている
小林取締役常務「5年ほど前から技術系の講座でポンプやブ

組む。良い発見の機会だ。ユーザーニーズを踏まえながらサプライヤーとメーカーが緻密なすり合わせを行うことで良い製品が出来上がる。これは日本のものづくりの良さだ。当社がこうした展示会や試乗会を行うのも、メーカーと丁寧に整合性を図り、より良い製品を作るためで、今後も継続して取り組む」

（梅田 大希）

日刊自動車新聞社が記事利用を許諾しています。